

「神の前に潔白な馬鹿げた信仰」

ダニエル 6 : 10 - 24

April.26.2020

ダニエル 6 : 10 - 24 (パワポ)

Preface

信仰に生きるということは、快く、愚かで馬鹿げた生き方を選択していくことのように見えるかもしれません。

創世記でノアは、馬鹿げたことに、砂漠のど真ん中に、人々から白い目で見られながらも、神の救いだと、家族総出で、何十年もかけて大きな方舟を作りました（創世記 6 : 13～）。

ヨシュアに導かれて、ついにカナンの地に入ったイスラエルの民たちは、エリコの天に高くそびえる城壁を打つ崩すんだと、これまた馬鹿げたことに、ただその町の周りをラッパを吹きながら回りました（ヨシュア 6 : 1～）。

ダビデと名乗る一人の羊飼いの少年は、愚かなことに、2 m 50 cm を優に超える誰も倒すことの出来なった最強の巨人戦士に向かって、石ころと紐をもって立ち向かっていきました（第一サムエル 17 : 1～）。

東方の博士たちは、馬鹿げたことに、空に現れた星について行けば、お生まれになったメシヤに会えると、旅に出ました（マタイ 2 : 1～）。

ペテロは、馬鹿げたことに、水深 43 m にもなるガリラヤ湖のど真ん中で、舟から湖面の方に出てしまいました（マタイ 14 : 28 - 29）。

そして、主イエス様は、愚かで馬鹿げたことに、いばらの冠をかぶり、十字架に架かりました。（マタイの福音書 27 : 29～）。

これらの信仰行為は、すべてが、愚かで、馬鹿げたことに見えます。

社会通念、世の常識から、大きく逸脱しています。

でも、これらすべてが、神の御旨に適うことでした。

Part One

今日の聖書箇所、ダニエルがしていることも、神の御旨には適うことですが、愚かで、馬鹿げた、社会通念や世の常識からすれば、大きく逸脱していることでした。

ダニエルは、ついに、権力者からの座から引きずり降ろされるだけでなく、獅

子の穴にまで投げ込まれてしまいました。

この獅子の穴の獅子達は、サファリパークの昼間の眠気眼でボーっとしているにいたライオンや、お腹が満たされてスヤスヤと寝ているおとなしいライオン達ではありません

獅子の穴の獅子達は、刑の執行がより残忍に執行されるように、最低でも1週間以上何も食べさせないで飢えている獅子達で、しかも人肉の味を知っている獅子達です。

24節には、そういう獅子であったことが良くわかる記述があります。

ダニエル6：24 (パワポ)

この通りです。

教会学校などで語られたり、見る絵は、少年ダニエルが、優しそうな笑顔のライオン達と和気あいあいとした様子のもものがほとんどですが、

実際は、82歳のダニエルと、よだれを垂らしながら、獲物を欲している獰猛な獅子達でした。

今、ダニエルは、ひとまず30日間だけ、唯一まことなる天の神様に祈ることを辞めさえすれば、こんな獅子の穴に投げ込まれるなんてことはなかったんです。

捕虜出身の部外者のダニエルが、実質国政を担う権力者となったことを妬んだメディア・ペルシアの高位高官たちが、ダニエルを落とし入れようと、王の弱みに付け込んで、30日間、王以外のものに祈願をしたり、祈ったりしたら、獅子の穴に投げ入れるという禁令を制定させました。

これは、高位高官たちが、ダニエルが日に三度、エルサレムの方向の扉を開けて、主なる神様に賛美と感謝をささげながら、祈っていたことを知っていたからこそその禁令ですね。

先週も言いましたが、信仰をもって、人を落とし入れることほど卑劣で、幼稚なことにはないにもかかわらず、国家のリーダー達が、これをするわけですね。

そして、ここで、ダニエルの取ることのできる社会通念的、常識的行為は、神に祈ることを30日間辞めることですね。

そうすれば、No.2の座を守れるだけでなく、獅子の穴に投げ込まれることもないんです。

でもダニエルは、祈ることを辞めません。

私たちクリスチャン、30日間、神様と1対1で、祈らないなんてざらじゃないですか？

ダニエルのように、ひざまずいて、朝・昼・晩の3回、神様を褒めたたえ、感謝をささげ、祈らないなんて、よくあることじゃないですか？

辞めるための努力なんか、全くいりません。
普段通り、生活しているだけでいいんです。

いや、もし、毎日そのように祈っていたとしても、30日間だけ祈るという行為を辞めて、30日経ったら、何食わぬ顔して、(また祈りを初めるなり、) 礼拝に出席するだけで、地位も、命も、守られるんです。

こんな簡単なこと、社会通念を大事にし、世の常識的範囲内で信仰を守ることがモットーにしている、クリスチャンと名乗る私たちには、至って、簡単なことではないですか？

Part Two

でも、ダニエルには、簡単なことではありませんでした。
とても難しいことで、命をかけなければならないことでした。

なぜなら、ダニエルには、聖なる神の霊が宿っているからです！

聖なる神の霊が宿っているまことのクリスチャンにとって、祈りは、まさに命そのものです。

受難週礼拝の時もお話ししましたが、人は、神の霊が宿って初めて、生きる者となるんです。

創世記2:7で、神の息を吹き込まれて、初めて、人は生きる者となるとありますが、この“息”と訳されている言葉は、霊とか、呼吸とも、訳せる言葉です。

つまり、聖なる神の霊が宿り、聖なる神の霊と共に生きるクリスチャンにとって、祈りとは、この生命体を保つためには、絶対必要な、必要不可欠な呼吸ですね。

祈りをもって、息苦しさから解放され、
祈りをもって、体中に新鮮な酸素が行き渡って気持ちがいいように、命が躍動し、

祈りをもって、力を与えられ、
祈りをもって、ぼやけた視界が鮮明になり、
祈りをもって、神が共にいてくださることを実感し、
祈りをもって、神の子とされたことを確信し、
祈りをもって、死んでも生きるという約束を実感し、
祈りをもって、滅びゆく、朽ちていくこの肉体のためだけに生きているのではなく、永遠のいのちを生き、また、二度と滅びることもなく、朽ちることもない、体を与えられるという約束を、噛みしめることが出来るのです。

すべての食べ物には、多かれ少なかれ、中毒性があると言います。
食べれば食べるほどに、それがまた、食べたくなるんですね。
だから、誰もが、やっぱり思い出して食べたくなってしまう、おふくろの味ですね。

祈りも、食と同じように、いや、食以上にクリスチャンの命を保ち、祈れば祈るほどに、その味が体に染みつき、祈れば祈るほどに、新鮮なおいしい酸素が体中に染み渡るように、命の神のご臨在を体験するようになるのです。

神を体験することに勝るものはないですよ？

祈りをもって、神を体験する味を占めたダニエルにとって、祈ることは生きることであり、祈らないことは死を意味しました。

祈らないことは、ダニエルにとってしてみれば窒息であり、祈らずに神から離れることは、ダニエルには、死でした。

Part Three

でも、社会通念や世の常識からすれば、馬鹿げた信仰行為ですね。

地位あつての信仰、学があつての信仰、利益あつての信仰、保証と安定があつての信仰、良い評価あつての信仰、健康あつての信仰、政治あつての信仰。

これが、世の常識です。
信仰が勝っては、いけないんです。

もし信仰が勝るならば、それこそ、愚かで、馬鹿げた生き方を選択していく常軌を逸した行為ですね。

我が家の次男と三男が、学校が休校で、春休みから1ヶ月以上、家内と家で一緒に過ごしているんですが、次男は話して聞かせればまあまあそれなりに言うことを聞いてくれるんです。

でも、三男の雅論は、良く言えば、ユーモアあふれる個性が光る子なのですが、平たく言いますと、まあ親の言うことを聞かないいたずら小僧なんです。

そういうこともあってか、家内がちょっとひどく体調を崩したんですが、お母ちゃんが体調を崩しても、なお、言うことを聞かないので、夜、私が帰宅して、「おい、雅論！お母さんの言う事聞かないと、お母さんそのまま死んじゃうぞ！」って言いながら、叱ったんです。

そうしましたら、それが、ショックだったようで、高校の寮に入っている長男から家に電話がかかってきた時、この雅論がお兄ちゃんに突然、「お兄ちゃん、僕、お母さんが死んじゃったら、一日も生きられないよ… 僕、お母さんが死んじゃったら、一日も生きられないよ…」て、涙声で、長男に訴えてるんです。

まあ、長男は、この言葉を聞いて、どういうことがあったのか、だいたい察しが付くわけですね。

この三男雅論の、「僕、お母さん死んじゃったら、一日も生きられないよ」という思いを、ダニエルは、神様に抱いていたんですね。

両親から離され、幼くして故郷エルサレムから、捕虜として捕まってきて、宦官とされ、妻がいたり、子どもがいたり家庭があるわけでもないダニエルにとって、ただ一人の家族と言える方は、天の神様だけですね…

ダニエルは、「僕、神様に祈らないと、一日だって生きられないよ。」という切実な、命に係わる思いが、実感があるわけですね。

祈らないことは、ダニエルにとって、まさに生死に係わることでした。

では、果たして、私たちには、こんな思いが、こんな実感があるのでしょうか？

Part Four

ひっ迫した状況に置かれたダニエルには、ひとつ、確信がありました。

それは、神の前に潔白であることは、必ず、神様がその潔白を証明してくださるという確信ですね。

80年間の祈りの生活の中で、このことを神の霊によって示されていました。

獅子の穴から救い出されたダニエルの言葉を見てください。

ダニエル6：22-23 (パウポ)

神の前に潔白であることは、必ず、認められるようになると言います。

だからと言って、自分で自分のことを自己肯定しながら、自分の潔白を主張して、神の前に潔白であると言い張ることを、神の前に潔白であるとは言いません。

獅子の穴に投げ込まれることよりも、地位を失うことよりも、神を褒めたたえることを優先したい。神を賛美し、日に三度ひざまずいて祈ることなくして、生きることが出来ない。というほどの、愚かで、馬鹿げた信仰を、快く、乗り気で、選択していく聖霊の導きが私の内で起こった時に、神の前に潔白だと、神ご自身が証明してくださいます。

決して、私の行いを正当化するための申し開きではないですね。

そして、このような、世から見れば、愚かで、馬鹿げているように見える生き方を選択できる後ろ盾は、「死んでも生きる。」という確固たる信仰です。

ヨハネの福音書 11 : 25 - 27 (パワポ)

これは、マルタとイエス様の会話の一部ですが、今、マルタの兄弟ラザロが病気で死んでしまい、マルタはイエス様に、「もしあなたが、ラザロが死ぬ前に、もう少し早く来てくだされば、助かったのに、なんで早く来てくださらなかったんですか？」と、ちょっと言い寄っていることに対するイエス様の応答です。

イエス様は、

ヨハネの福音書 11 : 25 - 26 (パワポ)

とマルタに語り掛けたところ、マルタが

ヨハネの福音書 11 : 27 (パワポ)

と、答えますが、この答えが、イエス様の質問と噛み合っていないことがわかりますか？

イエス様は、「死んでも生きる。わたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはない。これを信じるか？」と聞いているのに、

マルタは、「はい、あなたがメシヤであること、キリストであることは信じています。」って言うんです。

つまり、「イエス様、何馬鹿なこと言ってるんですか。あなたがキリストだということは認めますが、死んでも生きるなんて、そんな常識外れのことなんか信

じませんよ。」と言ってるわけですね。

キリストを信じるということは、神を信じることであり、死んでも生きるという命を信じることです。

でもこれは、限界のある人間の作った社会通念と常識からすれば、馬鹿げたことですね。

マルタの言っていることは、「社会通念にのっとり、世の常識の範囲内で、イエス様、あなたに従っていくことは出来ますが、世の人の目から見て、おかしいように見えることにおいては、ついていけません。」という宣言ですね。

要するに、マルタは、キリストを信じていると言いながら、キリストを信じていないんです。

「神の前に潔白であっても、世の目から見たら、愚かで、馬鹿げたことは致しません。」という、ちょっとずるさと、巧妙さを織り交ぜた、なんちゃって信仰告白ですね。

ここで、ダニエルだったら、こう答えますね。

はい、主よ。私は、あなたがよみがえりで、いのちで、あなたを信じる者は死んでも生きること、また、生きていてあなたを信じる者はみな、永遠に生きることを信じます。(パワポ)

Part Five

では、私たちはどうでしょうか？

世の中から見たら、愚かで、馬鹿げた生き方を選択してでも、信仰に生きることを望みますか？

そして、世の中から見たら、愚かで、馬鹿げた生き方を選択してでも、信仰に生きることを全うできるよう導く聖なる神の霊の、恐れるな！と大きな声で語り掛ける声が聞こえていますか？

この説教の最初に、ノア、ヨシュア、ダビデ、当方の博士たち、ペテロ、イエス様の、愚かで、馬鹿げた信仰行為を、快く、選択していった話をしましたが、その後、彼ら全員、どうなりましたか？

ご存知ですよ？

ノアは、大洪水より救われました。

ヨシュアは、天に高くそびえる城壁を打ち崩しました。

ダビデは、ゴリアテを打ち倒しました。
東方の博士たちは、お生まれになったキリストに出会いました。
ペテロは、湖の上を歩きました。
そして、主イエス様は、天の王座に就きました。

神の前に潔白で、馬鹿げた信仰に生きた者たちは、皆、主にあつて勝利しました。

でも一方で、このような生き方が出来なかった人たちについても、聖書は記していますが、その代表的な人物がイエス様を裏切ったイスカリオテのユダです。

3年間イエス様と寝食を共に、イエス様に従った信仰者でありながらも、信仰に生きるために、神の前に潔白な愚かで馬鹿げた生き方を選択していく事が、出来ませんでした。

逆に、最後の最後に、社会通念と、世の常識を選び取って行きました。

イエス様を裏切って引き渡すことは、政治的にも、民衆の心情的にも理に適うことであり、当時の有力者たちの思いにも適うものであり、しかも報酬まで得られることでした。

世の流れ、人の評価という観点からして、十字架刑に架けられる愚かな犯罪者として祭り上げられたイエス様についていくことこそ、社会通念や世の常識から大きく逸脱することでした。

信仰者であったとしても、“神の前に潔白であること”を選び取って行くことが、馬鹿らしく思え、

人の作った社会通念と世の常識に従うことこそ、“善”に思えてしまいます。

そして、その偽物の“善”に従っていく事こそ、当然やらなければならない一社会人として取るべき行動であり、“(神ではなく)人の前にあつて潔白なんだ”と、自分に言い聞かせ正当化しながら、ユダのみならず、残りの11人の弟子たち全員、イエス様を裏切っていました。

結局、政治的、社会的、教育的、学問的見地や、国家や学校や会社が発信する知見内に収まってくれないことには、信じられないわけですね。

私たちもそうですね。

でも、この信じられないことが、信じられるようになり、人の前ではなく、神の前に潔白な信仰に生きる者に、聖霊によって変えられていく様子が、使徒の働

きに記録しています。

そして、人の前に潔白なことが、必ずしも、神の前にあって潔白であるとは限らないということと、神の前にあって潔白なことは、必ず、人の前にあっても潔白であることも記録されています。

Part Seven

人の前に潔白であることよりも、神の前に潔白であることを選び取って行くよう導かれたダニエルが、もうひとつ気にかかることをしています。

それは、「バレないように祈れば良かったのに、なんでわざわざ、いつも通り、エルサレムの方角の窓を開けて、祈ったのだろうか？」と、ということです。

それは、ダニエルの信じる神様は、隠して置けるような存在ではないということです。

先週ダニエル書2章でダニエルの祈りと賛美を見ましたが、もう一度見てみましょう。

ダニエル2：20－23（パワポ）

ダニエルの信じる三位一体なる神様は、すべての被造物を超越し、栄枯盛衰はその手の内にあり、その手の内で、時を定め、季節を刻み、知り得ないことなど一つもなく、知恵と力の源であるお方です。

ダニエルは、自分が日に三度祈るクリスチャンだということを隠したところで、神が神であることを隠すことなんか出来ないということを良く知っていました。

神社仏閣、または天皇崇拝以外の宗教心を口にすることがはばかれる現代日本も似ているところがありますが（これのどこが民主主義なんだと思います）、ダニエルが置かれていた状況も、王を信奉すること以外の宗教心を公に現すということは、当時の社会通念や世の常識から逸脱することでした。

それでも、わざとそうしているんじゃないだろうかと思えるほどに、自分が日に三度祈るクリスチャンだということを、皆に知らしめています。

知って欲しい、まことの神がおられることを知って欲しいという宣教マインドの表れですね。

地位を失い、獅子の穴に投げ込まれてもいいから、人の都合で隠したい時に隠

して置ける偽の神々ではなく、

決して隠して置けるような存在ではない天地万物を造られた唯一の神様がいらっしゃるということを、知って欲しいという、宣教マインドがあったわけです。

まことの神をまことに信じているなら、隠すことなんか出来ませんね。

そして、唯一まことの神様を知ってもらいたいと、神の前に潔白な、愚かで馬鹿げた信仰を生きていくわけです。

そして、主にある勝利を得て、神が救いの神であることを体験しました。

神の前でも、人の前でも、潔白であることが証明され、周りの人たちが信仰告白するようになっていくんですね。

宣教や伝道に生きることは、「神の前に潔白な馬鹿げた信仰」の最前線であり、神の御旨に適うことです。

Conclusion

「シンジラレナイ〜」という流行語大賞にノミネートされた言葉でも有名だった、プロ野球日本ハムファイターズの監督だったヒルマン監督を覚えておられるでしょうか？

敬虔なクリスチャンとしても有名で、クリスチャン新聞などで取り上げられることもありました。

2006年に、日ハムを44年ぶりに日本一へと導き、アジアチャンピオンにもなり、2007年にはリーグ優勝させた敏腕監督でした。

その後、アメリカメジャーリーグの監督やコーチを歴任し、2017年には、韓国プロ野球のSKワイバーンズの監督になって、翌18年に韓国シリーズを制してチャンピオンへとチームを導くんですね。

なのに、せっかく優勝したのに、監督を辞めてアメリカに帰国してしまうんです。

チームを優勝に導いたわけですから、翌年の年俸は、爆上がり确实ですね。

なのにそれを蹴って、帰国してしまうんです。

韓国プロ野球史上、優勝監督が、翌年の契約をせずに辞めてしまうのは、史上初だそうです。

で、その監督を辞めた理由というのが、アルツハイマーにかかった継母の介護のためでした。

何年か前に、実母が召されて、その後お父さんが再婚をされたのですが、その再婚相手の新しいお母さんがアルツハイマーになったため、その介護のために、膨大な年俸を蹴って、優勝監督という名誉を蹴って、帰国したんですね。

このヒルマン監督の人生のモットーは、第一にイエス・キリスト、そしてその次が家族、その次が仕事だと、公言してはばからないんですね。

あるインタビュアーは、ヒルマン監督と話していると、牧師の説教を聞いていると思うほどに、神様の話ばかりするんだそうです。

クリスチャンとは、神の前に潔白なのに、世の中から見れば、愚かで馬鹿げた信仰に生きる人たち、それが、私たちクリスチャンですね。

じゃあ、そんな生き方出来ていますか？

そんな生き方をしたいと思いませんか？ それとも思わないですか？

もしくは、神の前にも潔白で、世の目にも立派な信仰に思えるものを望みますか？

そうであるならば、必ずと言っていいほど、

神の前には潔白で、世の中には、愚かで馬鹿げた信仰による生き方を選択しない限り、

神の前にも潔白で、世の目にも立派な信仰と映るところには、行けません。

ダニエルには、社会通念や世の常識から逸脱したとしても、神から逸脱することは、出来ないという決心がありました。

ここで、私たちに問われるのは、神様のために、神様の前にあつて潔白であることが認められるために、社会通念や世の常識から、信仰をもって、大きく逸脱する覚悟があるのかということです。

私たちそれぞれが置かれているところで、何がこれにあたるのかを、感謝と賛美をささげながら、主に祈り求めて行きましょう。

そして、ダニエルのように、畏れるものを畏れ、恐れる必要のないものを恐れ、ない真正クリスチャンとして歩ませていただきましょう。

お祈りしましょう。

祝祷：ダニエル6：23b